

# 『源氏物語』「紫のゆかり」考

—— 歌語としての「紫」を視座に ——

櫛 井 亜 依

はじめに

「紫のゆかり」という語は、『源氏物語』が初めて用いた語である。

『源氏物語』以前に成立した文学作品のうち、「紫」と「ゆかり」という語が両方詠みこまれた和歌はあるが、「紫のゆかり」という一つの語となつて意味を持ち、用いられた例はない。これは北山で光源氏が発見した少女、後の紫の上を指す語で、少女の呼称として次に挙げる末摘花巻と若菜上巻に用いられている。<sup>①</sup>

① かの紫のゆかり尋ねとりたまひては、そのうつくしみに心入りたまひて、六条わたりにだに離れまさりたまふめれば、…

(末摘花、一卷、二八九頁)

② 姫宮は、げにまだいと小さく片なりにおはする中にも、いといはけなき気色して、ひたみちに若びたまへり。かの紫のゆか

り尋ねとりたまへりしをり思し出づるに、…

(若菜上、四卷、六三三頁)

『源氏物語』において、光源氏のまなざしを通して捉えられる、「ゆかり」という語によつて表された関係性は、「紫の」という表現と結びつくことで人物を示す呼称となつた。では、「紫のゆかり」とは、「紫の」という表現により、どのように呼称として規定されているのだろうか。

## 一・研究史と問題点

これまで、「紫のゆかり」の「紫」という表現の問題は、色彩と古歌という二つの方面から論じられてきた。

まず、色彩についてであるが、これは桐壺をその殿舎の名前から桐の花、藤壺を藤の花と捉えることを前提としている。その上で、

桐壺、藤壺、紫の上の三人の女君を象徴するのが紫という色彩なのであり、色彩の連関によって示された人物の連関が「紫のゆかり」だと解する<sup>③</sup>。これは平安当時紫が特に好まれた色彩であったことも踏まえられている。ここで留意しておきたいのは、この立場においては桐壺更衣も「紫のゆかり」として捉えられているということである。しかし、殿舎の名前だけで、ひいては殿舎の名前に由来する呼称だけで、すぐさま色彩を示す表現と捉えることには飛躍があるのではないだろうか。

一方、「紫のゆかり」という表現が古歌を踏まえたものであるということとは、すでに古注以来多くの先行研究によって指摘され、論じられてきたところである<sup>④</sup>。しかし、そのような古歌に対し、「紫のゆかり」という表現の特異性についてはこれまであまり着目されてこなかったように思われる。「紫のゆかり」が新たな表現であるということは、そこに古歌との相違も見られるのではないだろうか。

言うまでもなく、「紫のゆかり」の表現の成立は、物語の場面で捉える必要があるだろう。「紫のゆかり」の呼称成立にあたり、「紫」が初めてそれに関わるのが、次の和歌においてである。

- ③ 手に摘みていつしかも見む紫のねにかよひける野辺の若草

(若紫、一卷、一三九頁)

この「紫」には、一般的に藤の紫色が重ねられていると解釈され

ている。次に挙げるのは、「手に摘みて」の和歌に付されている注釈である。

玉上琢彌『源氏物語評釈』<sup>⑤</sup> …

「紫」は藤の色で藤壺、「若紫」はその姪の君。紫草の根は染料に用いる。「根に通ひける」は血縁をいう『古今集』卷十七、雑上、題しらず、読み人しらず「むらさきのひととゆゑにむさし野の草はみながらあはれとぞ見る」(紫草一本はえているせいで、武蔵野の草は全部なつかしい感じがする。紫草はそれほど喜ばれたのである)の歌を胸においた歌である。

新大系(頭注)<sup>⑥</sup> …

紫草がその色から藤壺を暗にさし、それと根がからまりあう関係にある若君を思う。「紫の一本ゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ思ふ」(古今集・雑上・読人しらず)を念頭においての作か。

新編日本古典文学全集(頭注)<sup>⑦</sup> …

「紫」は紫草のことで、その根を染料とした。ここでは、その紫(藤)色から、藤壺をさす。「ね(根)にかよひける」は血縁関係をさし、「若草」が紫の上をさす。「紫の一本ゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」(古今集・雑上・読人しらず)などを念頭においた表現。

現代の注釈書の多くがこのように「紫」という表現が古歌を引きながら、藤の花の色を示しているとして捉える。この箇所「紫」の解釈によって藤が、先に述べたように更には桐の花まで解釈が拡大されながら、その紫色の連関が指摘されてきたのであった。発想として古今集歌が挙げられているが、和歌の用例からみてみると『源氏物語』において「紫」は紫草、かつ藤であるという解釈は成り立つのだろうか。

本稿では、問題の所在を二点に絞り考察したい。まず、「手に摘みて」歌の「紫」の解釈であり、これはひいては「紫のゆかり」の「紫」の解釈に繋がるものと考ええる。そして次に『源氏物語』以前の和歌を分析した上で古歌の表現と「手に摘みて」歌の表現との相違を捉えたい。

## 二、紫草由来の和歌にみえる「むらさき」

『源氏物語』以前の和歌の中で「むらさき」が紫草を示すものを確認していききたい。<sup>⑨</sup>

### 二二二『万葉集』の「紫」

歴史的に見るとこれは古く、『万葉集』から用例が確認できる。『万葉集』には「むらさき」という語は一七首に詠まれている。ここで着目したいのは、染色との関わりである。

#### 『源氏物語』「紫のゆかり」考

(1) 紫は 灰さすものそ 海石榴市の 八十の衢に 逢へる児や  
誰  
『万葉集』、卷十二、三二〇(一番)

これは灰をさすという染色の過程を詠み込んだ歌である。染色との関わりに関して、澤瀉久孝氏は次のように述べられている。

しかし花そのものは白色の小さい花で目に立つ程の美しさではなく、むらさきといふ名に心をひかれたものがあると考へてよく、当時の人が染料の美しさから、その植物に心を惹かれるといふ事は榛(一九、五七)の場合とも考へ合せて認める事が出来よう。<sup>⑩</sup>

このように、その色が好まれたため紫草自体も好まれたことから、様々な形で恋の歌において「むらさき」という語は詠まれている。<sup>⑩</sup>ここではその例を確認したい。

(2) 紫草の にほえる妹を 憎くあらば 人妻故に 我恋ひめや  
も  
『万葉集』、卷一、二二番)

これは紫草自体を示すもので、他には五首に確認できる。表記は卷一の二〇番歌が「武良前」、卷一の二一番歌、卷二の三〇九九番歌が「紫草」、卷三の三九五番歌が「紫」、卷一〇の一八二五番歌が「紫」、卷一四の三五〇〇番歌は「牟良佐伎」であるが、これらはすべて、紫草を表す例である。

また、紫が高貴なものとして名高いため「名高」の、濃い色であ

るから「粉濁」の枕詞にもなっている。次に挙げるのは全四例確認できるうちの二例である。

(3) 紫の 名高の浦の 砂地 袖のみ触れて 寝ずかなりなむ

〔万葉集〕、卷七、一三九二番

(4) 紫の 粉濁の海に 潜く鳥 玉潜き出ば 我が玉にせむ

〔万葉集〕、卷十六、三八七〇番

さらに次に挙げるのは、紫草を用いた染色、というものを意識した紫色を詠んだものである。

(5) 韓人の 衣染むといふ 紫の 心に染みて 思ほゆるかも

〔万葉集〕、卷四、五六九番

(6) 紫の まだらの縵 花やかに 今日見し人に 後恋ひむかも

〔万葉集〕、卷十二、二九九三番

(7) ……さ丹つかふ 色なつかしき 紫の 大綾の衣 住吉の 遠

里小野の ま榛もち…〔万葉集〕、卷十六、三七九一番

以上、「むらさき」の用例は、全て紫草に関わるものであった。

「むらさき」は視覚的に紫色全般を指すのではなく、紫草で染めたものか、紫草自体を指すのである。ここでいう紫色は、(5)などに直接表れているように、紫草によって染められ、変化するという過程をもった色である。その色は、(6)のように「花やかに」や、(7)のように「なつかしき」といわれるように、好ましいものの

表れとしての表現なのである。

二二二「古今和歌集」以降の「むらさき」

続いて平安時代の用例を見ていきたい。『万葉集』と同様、以後の勅撰集の用例を見ると、『古今和歌集』全四例、『後撰和歌集』全三例に至るまで、「むらさき」の用例は全て、紫草由来の表現であることが確認される。次の例は『万葉集』に連なる伝統として、染料としての紫草に事寄せて、恋情を歌ったものである。

(8) 題しらず よみ人しらず  
こひしくはしたにをおもへ紫のねずりの衣色にいづなゆめ

〔古今和歌集〕、卷二二、恋三、六五二番

また、染料であることから、装束によって位階を表す例も見られる。

(9) 庶明朝臣中納言になり侍りける時、うへのきぬつかはす

とて 右大臣

思ひきや君が衣をぬぎかへてこき紫の色をきむとは

〔後撰和歌集〕、卷二五、雑一、一一二一番

『万葉集』の場合と異なるのは、これらと同時代、紫草由来ではない、他の植物を詠んだ歌の中に「むらさき」の例が見られるようになることである。ここで着目したいのは、『古今和歌六帖』の題に明確に表れる分類意識である。「りうたん」「ふち」など、「草」の題の和歌の中で「むらさき」が使われる例は五例あるものの、

「色」という題においては、「むらさき」で詠まれているのは、八例の用例全て紫草由来である。ここからは、この時期、紫草由来の「むらさき」と、紫色の外見をもつ植物を表現した「むらさき」とは、表現として区別する意識があつたということが分かる。

一方、平安時代において、『万葉集』には見られない新たな主題が紫草を詠んだ和歌に定着する。それは愛情の派生という主題を持った『古今和歌集』や『伊勢物語』に見られる和歌である。

(10) 紫のひととゆゑにむさしのの草はみながらあはれとぞ見る  
（『古今和歌集』、卷一七、雑上、八六七番）

(11) めのおとうとをもて侍りける人にうへのきぬをおくると  
てよみてやりける  
なりひら朝臣

紫の色こき時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける  
（『古今和歌集』、卷一七、雑上、八六八番）

(12) むらさき  
しらねどもむさしといへばかこたれぬよしやそこそはむら  
さきのゆゑ  
（『古今和歌六帖』、五帖、色、三五〇七番）

(13) 紫の野辺のゆかりの君により草の原をも求めつるかな  
（『うつほ物語』、葦開上、一卷、三七九頁）

これらの和歌は、本質的には『万葉集』以来の染料紫草の好ましさに由来するものである。そういう意味でそれまでの伝統にはみ出

すものではない。しかし、古今集以降に見える新しさは、その紫草以外の、周囲に生えている草木に対しても、紫草との関わりから好ましい感情を持つ、ということである。ここで強調したいのは、「むさしの」や「野」というように、紫草とそれ以外の草との繋がり、生えている場所が同じであるということと説明する点である。

これらは、(10) (11) によって『伊勢物語』四一段が構成されているように、自分の妻と同様に妻の親戚に対しても愛情を感じる、という主題として解されている。(13) は、仲忠と梨壺の兄妹関係を「紫の野辺のゆかり」と表現したもので、古今集以来の主題とその表現がすでに定着していることを示しているといえよう。

以上をまとめると、次のことを確認することができる。『万葉集』以来、紫草由来の「むらさき」の用例は、紫草自体と紫草で染めた色彩のみを表しており、平安時代においても紫草由来の表現とそれ以外の植物を表現するものとは、意識して区別されている。紫草は先に挙げたように、生えているその外見に紫色は表れない。その染料としての好ましきから、紫草は植物自体が好ましいものを表す表現であった。そして『古今和歌集』の時代から、紫草と同じ土地に生える草への親しみ、すなわち妻とその親戚の者への愛情を主題とする表現が定着するようになる。その表現は、視覚的、具体的というよりも、染料という一段階を経た上での、観念的で比喩的な表

現なのである。

三、紫草以外を詠んだ「むらさき」

ここでは、先に挙げた「手に摘みて」の和歌の解釈で問題となる藤の花などの紫草以外の植物と「むらさき」表現との関係を『源氏物語』以前の和歌の中で確認したい。

まず『万葉集』では、「藤」「藤波」の用例全二四首の中で、藤と「むらさき」は一緒に詠まれることはない。さらに言えば、藤は色彩をもって詠まれることはなかった。

三一、紫草以外を表す用例の登場

紫草以外の植物が「むらさき」いう語とともに和歌に詠みこまれるのは、平安時代に入ってからである。

(14) むらさいののきく

なにしおへばはなさへにはふむらさきのひととぎくにおけるはつしも  
(『寛平御時菊合』、二番)

これは八九一年、宇多天皇の治世において行われた歌合の和歌で、菊を「むらさき」として詠んだものである。以後、歌合や私家集において、菊や藤、萩、竜胆、女郎花など、様々な紫色の花をつける植物を詠んだ歌の中で「むらさき」という表現が用いられるようになる<sup>①</sup>。最も用例が多く確認できたのは藤で、その一方、用例中一

首しかない植物も確認できる。用例数が多いので、その一例を挙げる。

(15) 右

しをに

あきののにいろなきつゆはおきしかどわかむらさきに花はそ  
みけり  
(『本院左大臣家歌合』、一八番)

(16)

りむだう

した草の花をみつればむらさきに秋さへふかくなりけるかな  
(『本院左大臣家歌合』、二〇番)

(17)

三月十首

左勝

むさしのにいろやかよへるふぢのはなわかむらさきにそめて  
みゆらむ  
(『亭子院歌合』、二九番)

先に述べたように勅撰集で確認されるのは『拾遺和歌集』まで待たねばならないが、歌合や私家集においては、平安時代において飛躍的に紫草以外の用例が増える。むしろ『源氏物語』に時代が近づくとつれて、紫草由来の用例の方が減少してくる。これらの例は、全て視覚的に捉えられた紫色である。植物の外見には表れない紫草由来の「むらさき」との違いはここにある。勿論、染色によって紫色になった衣などは、視覚的な紫であるが、紫草由来の色彩は、紫

草によって発色したそれしか示さなかった。一方、平安時代に入つて和歌に詠まれる「むらさき」は、花など様々な植物の色彩を表現するようになる。従つて、ここで用いられている「むらさき」は詠み手が捉えた色彩を表し、同時に必ずその色彩を持つ植物名が詞書か和歌において詠みこまれる。

### 三―二、紫草と関連づけられる紫草以外の植物

「手に摘みて」歌を考察するにあたり着目したいのは、紫草と紫色の花の植物との関係を「草のゆかり」として詠んだ次の例である。

(18) 蘭

むさしののくさのゆかりにふぢばかまわかむらさきにそめて  
にはへる

(19) よかはにて、さくなんさうをみて

むらさきのいろにはさくなんさしのの草のゆかりと人もこそ  
みれ

これらは、「草のゆかり」という表現が『源氏物語』の「紫のゆかり」という表現と近いとしてしばしば挙げられる和歌である。勿論、これらには前章で挙げた古今集歌「むらさきのひととゆゑに」歌の発想が踏まえられ、ともに紫草の生える場所と同じ場所にあることに事寄せて紫草で染めた紫色との類似を詠んだものと考えられる。ここでは、染料ではないので当然だが、紫色の花によって

他の植物が染まる、という例が一例もないことを指摘しておきたい。

以上、紫草以外の植物について「むらさき」と表現される用例を検討してきた。平安時代以降、詠み手の視覚によって自由に捉えられる紫色を示す表現となったことが分かる。しかしここで強調したいのは、紫草以外の植物について「むらさき」と表現される場合、必ずその植物名が明示される、ということである。「むらさき」という表現だけで藤などの紫草以外の植物を表現する例はない。さらに、紫草と紫色の花の両方が関係づけられ一首の和歌に詠まれる例には、古今集歌(10)などの発想が踏まえられ、紫草からその他の草へ、という派生の仕方については前章の例と変わらないことが確認された。つまり、紫草以外の植物、紫色の花の植物が愛情を派生させる大本となることはないのである。

このように『源氏物語』以前の用例を見ていくと、紫草由来とその他の植物との詠まれ方の違いが明確に認められるのである。

### 四、「紫のゆかり」の「紫」

では、これまで確認したような和歌の用例から『源氏物語』本文の「紫」はどのような用例として確認できるだろうか。また、そこから『源氏物語』が「紫のゆかり」の呼称をどのように規定し、成立させているかを考察したい。

ここで、研究史でも挙げた「手に摘みて」歌の「紫」の解釈について考えてみたい。

先行研究に指摘されるように、この「紫」が紫草のことであり、和歌の主題が『古今和歌集』の「むらさきのひとつもとゆゑに」歌に発想があることは、すでによく知られているところである。しかしここで問題となるのは、この「紫」に藤壺、すなわち藤の花の紫色が重ねられているとする解釈である。

結論をいうならば、和歌の「むらさき」表現の伝統から見ると、ここに「藤」が詠みこまれていると考えることはできない。まず、三章で述べたように、「むらさき」だけで、植物名が示されず藤を示すような和歌の用例はない。また、古今集歌の発想を踏まえて紫色の花を詠む例としては、三章で挙げた例があった。しかし、発想を踏まえた和歌であっても、中心に位置づけられているのは全て紫草であった。紫草以外の植物が中心となり、他の草へ親しみが派生するという用例はないのである。和歌の伝統からしてこの和歌の中で藤を示すことが不可能ならば、和歌の前後に藤の花の話題が挙げられるなど文脈の中でそのような解釈へと導く仕掛けが必要となるはずであるが、それらも確認できない。<sup>11)</sup>

さらに言えば、藤のような女君として例えられるのは明石中宮であり、玉鬘巻で紫色の衣を配られるのは明石の御方である。紫色の

衣を着せた童女を仕えさせている場面としては秋好中宮が挙げられる。また、桐壺更衣と藤壺女御は、視覚的に全く装束や植物の比喻を用いて表されない女性なのである。このことから考えると、今挙げた植物による比喻や装束といった視覚的な紫色を表現した例と、古歌の発想に基づく「紫」とは混同せずに、区別して考えるべきであろう。従って、これは和歌の表現の伝統に即した「紫」で紫草に由来した表現であり、藤の花の色を示していると読み取ることとはできない。紫草と同じ野辺に生える「若草」との関係も藤壺女御と少女のそれに例えた表現であると解釈するのが適切である。

では「手に摘みて」歌は、古今集歌などの古歌とどのように違うのだろうか。ここで着目したいのは、「ねにかよひける」という表現である。

紫草は根が染料となることから、「根」が表現に表れるものも多い。その「根」の表現は、大きく二つに大別できると思われる。まず一つは、『万葉集』に代表されるような根が地中に張っている状態を詠んだもの、もう一つは「ねずり」のように根で染めることを詠むものである。次に挙げるのは、「むらさき」かつ、「ね」（根）の用例が確認できるものである。

【根が張っている例】

(20) 紫草の 根延ふ横野の 春野には 君をかけつつ うぐひす



鳴くも

〔万葉集〕、卷十、一八二五番

(21) 紫草は 根をかも終ふる 人の児の うらがなしけを 寝を

終へなくに 〔万葉集〕、卷十四、三三〇〇番

(22) ねもただにけれぬるのべのむらさきになべてとおもひしこと

ぞたえぬる 〔伊勢集〕、一二六六番

(23) かへし

むらさきのいろにつけてもねをぞなくきてのみゆべき人しな

ければ 〔一条撰政御集〕、四七番

(24) むらさき

むらさきのねはふよしの春ののは 君をこひつつ鶯ぞなく

ひさしく京にももし給ひて、あすなんかへるべきときこ

(25) え給へるしも月に

むらさきのね見ぬものゆゑむさしのをたづねしほどにすゑば

くちにき 〔道信集〕、五〇番

【根で染める例】

(26) 題しらず

よみ人しらず

こひしくはしたにおもへ紫のねずりの衣色にいづなゆめ

〔古今和歌集〕、卷一二、恋三、六五二番

(27) 題しらず

よみ人しらず

『源氏物語』「紫のゆかり」考

まだきからおもひこきいろにそめむとやわか紫のねをたづぬ

らん 〔後撰和歌集〕、卷一八、雑四、二二七七番

(28) むらさき

おもふともしたにやははんむらさきのねずりのころもいろに

いづなゆめ 〔古今和歌六帖〕、五帖、色、三五〇五番

(29) いみじううらむれば、時時はきこゆるをりもあるはと女

のいふに

ことのはは色やは見ゆるはこむらさきふかき心はねそめてぞ

しる 〔兼盛集〕、二二五番

(30) 御かへし

したにのみなげくをしらでむらさきのねずりのころもむつま

しきゆゑ 〔実方集〕、一七〇番

この「手に摘みて」歌に近い表現としては、特に前者、根が地中

に張っている状態を詠んだものに近い。しかしここで強調したいの

は、今挙げた「むらさき」と「根」が詠みこまれた例において、

「かよひける」という表現を用いた用例が一例もないことである。

ここに、先に挙げた『古今和歌集』(10) (11)などに代表される和

歌の主題である愛情の派生を土台としながらも『源氏物語』独自の

表現が窺える。二章で確認したように、古今集歌の発想を踏まえる

ものは、多くが武蔵野などに代表される地名や「野」など、同じ土

地に生えていることの縁を用いて紫草と他の植物との関わりを説明している。しかし「手に摘みて」歌は、根と根が「かよ」っていることよって説明するのである。

「ねにかよひける」に関しては、先に挙げた玉上評釈や新編全集に代表されるように、血縁関係を表していると解釈されている。勿論、「ねにかよひける」の理解としては指摘される通りであろう。しかし「ねにかよひける」という表現に着目すると、これは伝統的な和歌の表現の中にはみることができない。この表現によって、古今集歌は確かに踏まえられながらも、そのままではなく、血縁から更に限定的に見出された藤壺女御と少女との関係が示される。言い換えれば、血縁関係を土地の縁に例える古今集歌や『伊勢物語』が想起されることによって、差異として、血縁から更に特化された藤壺女御と少女との関係が浮かび上がってくることになるのである。ここに、古歌を利用した、系図（血縁）から系譜（藤壺から少女へという身代わりの関係）を立ち上げらせる物語の仕掛けがある。

### おわりに

以上、「源氏物語」以前の和歌の用例と『源氏物語』の表現から、「紫のゆかり」の「紫」に着目して考察してきた。『源氏物語』以前の和歌の「むらさき」の用例は、植物に関わるものとしては、紫草

由来の表現とそれ以外の紫色の植物に由来する表現とに大別される。紫草由来のものは、紫草によって染められた紫色、また草そのものへの親しみが詠まれ、『古今和歌集』以降、血縁の者への愛情の派生という主題をもった。一方、藤などに代表される紫草以外の紫色の花は、必ず植物名が詠みこまれ、「むらさき」という表現だけで紫草以外の植物を表すことはない。また、紫草と関わりながら詠まれる場合も、藤などの紫の花が中心となり色彩や愛情の派生を主題とするような用例は確認できなかった。このように、紫草とそれ以外は、表現や主題において明確に違いが表れている。

これらを踏まえると、藤壺女御と北山の少女との関係を述べた「手に摘みて」歌の「紫」、ひいては「紫のゆかり」の「紫」は、藤の紫色を指すと解することはできない。同じ理由で、桐壺から桐の花を連想し、「紫のゆかり」の「紫」として捉えることも不適当であると考える。「紫のゆかり」とは、紫草由来の和歌の伝統表現を踏まえ、かつ「ねにかよひける」という特異な表現を用いた和歌によって強固な関係を示した表現であるといえるのではないだろうか。つまり、血縁から更に限定的に見出された藤壺女御と少女との関係を示すものである。

そしてこの「紫」と、光源氏のまなざしを通して捉えられる「ゆかり」という表現とが結合し、「紫のゆかり」の呼称が成立する。

この『源氏物語』独自の方法を担った呼称は、和歌に基づく表現の中で成立したのであった。

注

『源氏物語』本文引用は、全て新編日本古典文学全集（小学館）による。和歌の引用は、『万葉集』『うつほ物語』は新編日本古典文学全集、その他は『新編国歌大観』（角川書店）による。なお、和歌の語彙検索には、『新編国歌大観 CD-ROM ver. 2』を用いた。

① 「紫のゆかり」は竹河巻にもう一例確認できる。

これは、源氏の御族にも離れたまへりし後大殿わたりにありける悪御達の落ちとまり残れるが問はず語りしをきたるは、紫のゆかりにも似ざめれど、かの女どもの言ひけるは、…

（竹河、五巻、五九頁）

ただし、この竹河巻の用例の「ゆかり」は、「紫の上づきの女房」（新編全集竹河巻、五巻、五九頁頭注）と解するのが一般的である。これは、「紫の上」や「紫」という呼称が成立した後の例である。①②の二例は藤壺と紫の上の関係によって規定された固有名詞であり、性質が異なるため本稿では取り上げない。

② 「ゆかり」の検討についての詳細は拙稿『源氏物語』における「ゆかり」の変質―物語の方法としての言葉―（『古代文学研究 第二次』第十五号、二〇〇六年一〇月）を参照された。

③ 荒木良雄「源氏物語象徴論―特に女性の呼び名について―」（『国文学解釈と鑑賞』一九四八年三月号）、伊原昭「紫の象徴―源氏物語における―」（『平安朝文学の色相―特に散文作品を中心として―』笠間書院、一九六七年九月、一六五―一七九頁）。一色和寿子「源氏物語における

色彩思考―和歌における「紫」の存在性について―」（『源氏こぼれ草』巻一八、一九八三年四月）、『源氏物語における色彩思考―和歌における紫の存在性について その二―』（『源氏こぼれ草』巻一九、一九八四年五月）、『源氏物語における色彩思考―その十四―紫―から読む源氏物語』（『源氏こぼれ草』巻二六、一九九一年二月）。森田直美「桐壺更衣という呼称―元白唱和における「紫桐花」の受容を中心に―」（『国文学』四一五号、二〇〇六年二月）。

④ この指摘は『源氏釈』（渋谷菜一編『源氏物語古注集成 源氏釈』第一六巻、二〇〇〇年一〇月）都立中央図書館蔵「伊行源氏釈」や『河海抄』など古くから確認できる。近年では、神尾暢子「物語女性の呼称表現―紫上呼称の選定原理―」（『源氏物語と歌物語 研究と資料―古代文学論叢第九輯―』、武蔵野書院、一九八四年二月）で「紫のゆかり」を含めた紫の上の呼称全体に対して古歌と物語本文による詳細な検討がなされている。

⑤ 玉上琢彌『源氏物語評釈』第二巻、角川書店、一九六五年一月、一六頁。

⑥ 柳井滋、室伏信助、大朝雄、鈴木日出男、藤井貞和、今西祐一郎校注『新日本古典文学大系 源氏物語』一、岩波書店、一九九三年二月、一八二頁。

⑦ 阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男校注『新編日本古典文学全集 源氏物語』①、小学館、一九九四年三月、一三九頁。

⑧ 新潮日本古典集成（石田稔、清水好子校注『源氏物語』一、新潮社、一九七六年六月）には、和歌の「紫」と藤の紫が関連するという解釈は示していない。

⑨ 『源氏物語』以前の用例について指摘する場合、表記は資料、諸本によって様々だが、本稿では表記は特に問題としないため、全て「むらさ

き」と平仮名で示す。

- ⑩ 澤瀉久孝『萬葉集注釈 第二』、中央公論社、一九五七年二月、二〇二頁。

- ⑪ 伊原昭「万葉の染色―万葉の色―その背景をさぐる」、笠間書院、一九八九年三月、二〇頁。

- ⑫ 「むらさき」が確認できる『古今和歌六帖』の用例のうち、一八四六番歌、一八四八番歌が「水」、二九七七番歌が「雑思」の中に所収されている。これらの和歌は紫草由来の表現をもつ万葉歌と思われる。これらが「色」に分類されていないことは、「むらさき」という表現よりも、当時解された主題による分類に従ったためと思われる。

- ⑬ 西山秀人「平安和歌の色―紫―のバリエーション」(『国文学 解釈と鑑賞』二〇〇六年二月号)では、藤の花が漢詩文を媒介として「むらさき」と表現され和歌に移入されたことが詳細に論じられている。

- ⑭ 「紫」の用例ではないが、文脈において紫草由来の表現を意図的に藤の色と結びつける物語の仕掛けの例としては「色も、はた、なつかしきゆかりにしつべし」(藤襲葉、三卷、四三七頁)という内大臣の発言が挙げられるだろう。この表現には諸注釈書が示すように古今集歌の「紫のひとつもとゆゑに」歌の発想が踏まえられている。内大臣は藤の花の色は「ゆかり」の色といえるだろうと、「しつべし」と自分の解釈を示すような表現をもつて述べる。このような言い方からは、藤の花の紫色をゆかりの色と解するにあたり、古今集歌の表現から離れて成立していないものと思われる。

- ⑮ 野分巻、三卷、二八四頁。及び若菜下巻、四卷、一九二頁。

- ⑯ 玉鬘巻、三卷、一三六頁。

- ⑰ 少女巻、三卷、八一頁。

- ⑱ 一色和寿子「―源氏物語における色彩思考―その十一―彩りなき女君

「桐壺・藤壺・葵の上」をめぐって『源氏こぼれ草』第二十二卷、一九八七年六月。

〔付記〕 本稿は、二〇〇八年度秋季同志社国文学会研究発表会における口頭発表に基づくものです。ご教示くださいました方々に、心から謝意を申し上げます。